

人権教育の視点を反映した家庭科授業

—家族員一人ひとりに目を向けた家事分担へ—

伊波富久美^{*1} 外山敦子^{*2}

Home Economics Classes that Reflect the Perspective of Human Rights Education
:To the Housework Allotment that Paid More Attention to Each Member of
Family

Fukumi IHA^{*1} and Atsuko TOYAMA^{*2}

I. 研究の背景および目的

家庭科教育と人権教育は一見すると距離があるように思えるかもしれない。しかし「人権教育及び人権啓発の推進に関する法律」¹⁾の基本理念においては、学校等のさまざまな場を通じて、人権尊重の理念に対する理解を深め、これを体得することができるよう多様な機会の提供等が行われなければならないとしている。また、人権教育の指導方法等に関する調査研究会議^{注1)}は資料1のように「(1) 学校における人権教育の目標」において、人権尊重の理念について「児童生徒にもわかりやすい言葉で表現するならば、[自分の大切さとともに他の人の大切さを認めること]である」²⁾としており、それはすべての教科等で考えられなければならない問題といえる。特に、家族をはじめとする身近な人々との関係性を学習内容とする家庭科教育においては、なおさら重要な課題である。

そこで本研究では、人権教育の視点から家庭科教育で取り上げられ得る学習内容を整理した上で、人権教育の視点を反映した授業を構想・試行することによって、その有効性と課題を明らかにし、家庭科教育の目指すべき一つの方向性を示すことを目的とした。

資料1：学校における人権教育

(1) 学校における人権教育の目標

人権尊重の理念は、平成11年の人権擁護推進審議会答申において、「自分の人権のみならず他人の人権についても正しく理解し、その権利の行使に伴う責任を自覚して、人権を相互に尊重し合うこと、すなわち、人権の共存の考えととらえる」べきものとされている。このことを踏まえて、人権尊重の理念について、特に学校教育において指導の充実が求められる人権感覚等の側面に焦点を当てて児童生徒にもわかりやすい言葉で表現するならば、[自分の大切さとともに他の人の大切さを認めること]であるということが出来る。

人権教育の指導方法等に関する調査研究会議「人権教育の指導方法等の在り方について」平成20年3月より抜粋、太字は筆者による

*1 宮崎大学大学院教育学研究科 *2 宮崎市立大塚中学校

Ⅱ．研究内容及び方法

1. CiNii の 1990 ～ 2021 年における家庭科教育論文について、人権教育に関わるキーワードで検索を行い、その動向を把握した上で、これまで家庭科で取り扱われてきた、あるいは取り扱われ得る学習内容を整理し、家庭科教育と人権教育の関連性について検討した。
2. 中学校「技術・家庭」科の家族学習において、人権教育の視点を反映した授業試案を構想し、2021 年 11 月 11 日に、授業「中学生にとっての家族」を 1 年生 31 名（男子 15 名、女子 16 名）を対象として試行した^{注2)}。ワークシートの記述内容及びビデオカメラによる録画記録を分析し、授業の成果と課題について検討した。

Ⅲ．研究の成果と課題

1. 家庭科と人権に関連するキーワード

これまでの家庭科教育研究における人権に関連した内容の取り扱いの状況を把握するため、CiNii における 1990 ～ 2021 年の家庭科関連論文 5,820 件 (14,147 件) に関して、表 1 に示したキーワードで検索し、各々の論文数を示した。

表 1：家庭科教育研究における人権関連キーワード

	2010～2021年	1990～2021年*
ジェンダー	103	225
男女共同参画	43	87
男女平等	30	65
児童虐待	19	42
DV	8	9
男女雇用機会均等	2	2
LGBT	3	3
夫婦別姓	0	6
家父長制	0	3
ワンオペ育児	0	0
ヤングケアラー	0	0
高齢者の虐待	0	0
セクシャルハラスメント	0	0

* 1990～2021年には2010～2021年の件数を含む (件)

家庭科教育研究においては、人権に関連する問題として 1990 ～ 2021 年の間に、「ジェンダー」が 225 件、「男女共同参画」が 87 件と積極的に取り上げられてきたといえる。授業実践においても、これまでジェンダー等の視点は意欲的に取り入れられ、特に高校で数多く実践されてきた。

さらに「男女平等」や「児童虐待」なども、各々 65 件、42 件と目が向けられている。それらは主に、「男・女間」、「親・子間」への着目ということができ、法的な問題も生じてくる。一方、最近、家族の問題として注目されるようになった「ワンオペ育児」や「ヤングケアラー」などを扱った論文は近年でも見受けられなかった。今後はそのような視点からの家庭科教育へのア

アプローチがなされる可能性もあろう。

そこで、これまで家庭科教育で取り扱われてきた、あるいは取り扱われ得るキーワードを「男・女」、「親・子」、「制度」の3つの視点から整理し、図1のように示した。家庭科は“人と人との具体的で現実的な関わり”を学習内容としており、自らが“家族をはじめとする身近な誰かを生きづらくしていないか”振り返り、意識化する場を設定し、人権教育の視点を反映していくことは家庭科授業においても求められる。

家庭科の歴史を振り返ってみても、第二次世界大戦後の民主化を進めるための教科として、「社会科」と並び「家庭科」が新設されて現在に至っている。図1に示される人権に関わる様々な課題との関連もふまえた上で、家庭科授業を構想していくことが重要であろう。

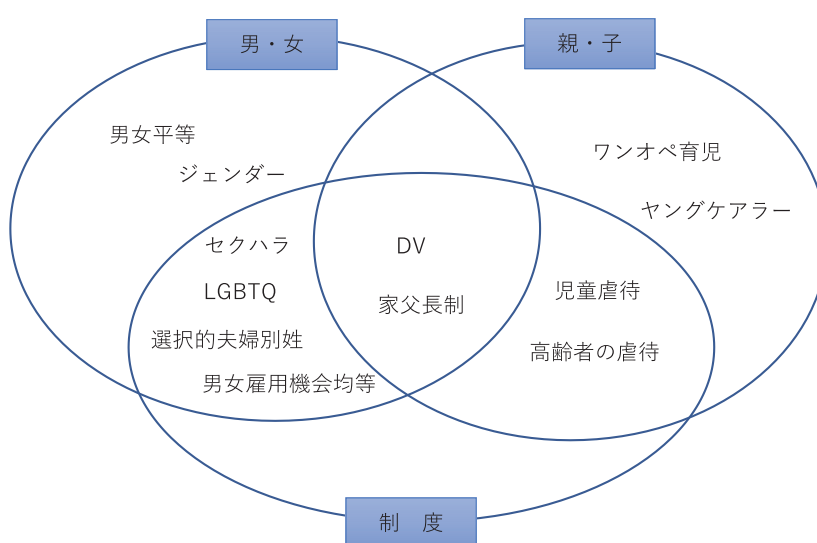


図1：家庭科で取り扱われ得る人権関連キーワード

2. 中学校・家族分野での人権教育

(1) 家族の捉え方の課題

家族をはじめとする身近な人々との関係において、“自分の大切さとともに他の人の大切さを認めること”ができるようになるためには、家族の捉え方³⁾を今一度、問い直してみる必要がある。

家庭科では家族の形態について触れることもあるが、図2のAのように教師も生徒も家族を一つの関係性だけに着目し、例えば“血縁関係”や“法的関係”にのみに目を向け、“ひとまとまり”として捉えていないだろうか。そのように捉えていると、家族の誰かがいなくなった時に、家族の一部が欠けてしまったように感じるのではないかと懸念される。

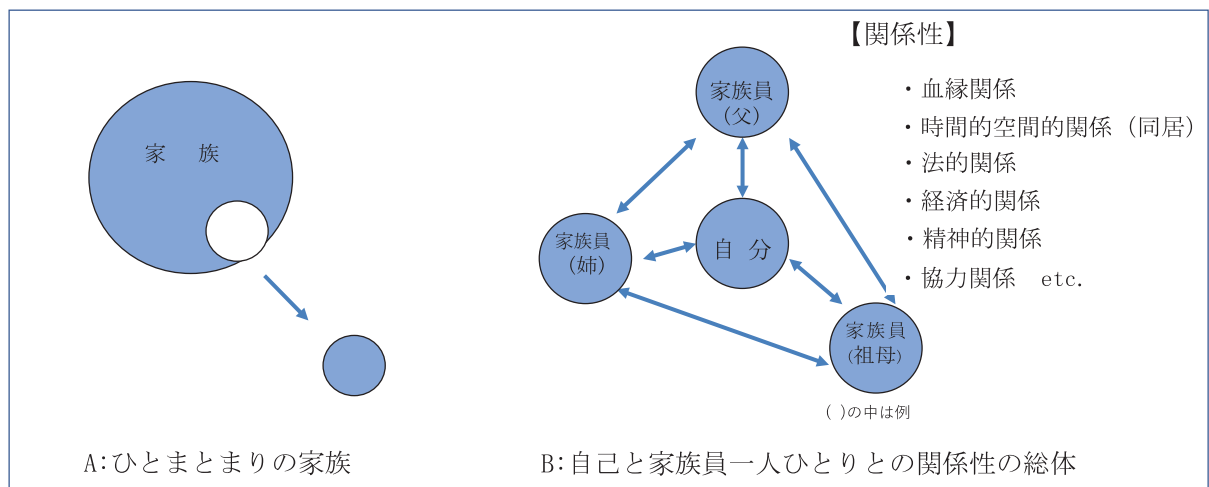
しかし、図2のBに示したように、家族員は“一人ひとり”が存在しているのであり、そのひとりの家族員と他の家族員との間にさまざまな関係性がある。血縁関係や法的関係だけでなく、同居しているか否かなどの“時間的空間的共有の有無”や“経済的關係”、“精神的關係”、“協力關係”など多様な関係性がある。そのような血縁関係や法的関係以外の関係性にも目を向けることで、Aのように一面的に家族を“ひとまとまり”と捉えてしまい、他者だけでなく自

らをも生きづらくしている状況から抜け出すことができるのではなかろうか。

“一人ひとりの存在”を意識化していくことが“自分の大切さとともに他の人の大切さを認めること”の第一歩であろう。そして、そこに多様な関係性があることに気づくことで、一面的であった視野を広げていく。それが、図2のBのように「関係性の総体」として家族を捉えることであり、それによって、一つの関係性が困難な状況にあっても他の関係性から家族の捉え直しを図ることができれば、学習者自身も生きやすくなると考える。

小・中学校の家庭科では、「家族・家庭生活」の学習において家事の分担等について取り上げられている。そこでは、家族員間の様々な関係性の中でも特に個人々々を意識した“協力関係”への着目を促すことが可能である。単に生活時間を工夫して家事をどのように分担すればよいかについて考えさせるだけではなく、まず自らの家族の“一人ひとり”の状況に目を向けさせることが重要であろう。その上で、家事分担の現状を振り返り、自身のなかに家族員に対する思い込みや偏った見方がないか見つめ直す場を用意すること、そして血縁関係や法的関係に限らない“協力関係”についても考えさせ、自らがそこにどのように関わっていくか考察する場を用意していくことが人権教育の視点を反映した家庭科授業を構想していく上で肝要である。

そこを押さえた上で、従来家庭科が扱ってきた家事分担を具体的に考える授業へとつないでいくことが有効と考える。



伊波.「わかったつもり」を問い直す家庭科での学び.あいら出版.2014p.80

図2：家族の捉え方

(2) 題材「自分の成長と家族・家庭生活」の構想と試行

1) 授業構想の視点

本授業は、中学校・家庭分野の内容 A「家族・家庭生活」における「(1) 自分の成長と家族・家庭生活」及び「(3) 家族・地域との関わり」、「(4) 家族・家庭生活についての課題と実践」⁴⁾に関連する題材であり、資料2に示した題材構成とした。

従来の家族学習のように、“家事分担を行うこと”を前提として、“どのように分担し実践するか”を中心とした授業構成にするのではなく、本試案では、家族員間の関係性を具体的に検討する教材として、家事分担についての考察を位置づけている。

本題材「自分の成長と家族・家庭生活」では、まず、今の自分とこれまでを振り返った上で、家族・家庭の役割に目を向けていく。そして本時「中学生にとっての家族」(3/4時)で、自らの“家族に対する固定的な捉え方”、例えば子どもは面倒をみてもらう立場、母親が家事の中心を担うなど、を見つめた上で、家事分担を具体的な切り口としながら、自分の立場からだけでなく、他の家族員の視点に立って家庭の営みを捉えることで、自らがどのような関わりを持っていくのが良いか検討できるようにした。それにより、“自分の大切さとともに他の人の大切さを認めること”および“自らとともに、他者も生きやすい(暮らしやすい)家庭生活を営めるように”なっていくことが期待できる。

夫婦間の家事分担をジェンダーの視点から取り扱う実践は、高校の家庭科などでは多く見られるが、ここではその視点に加えて、家族員の家庭及び家庭以外での“立場”や“役割”に焦点を当てて「時間的な余裕」を取り上げることで、一人ひとりの生き方を尊重できるような家事分担を考える場を設定した。

また、家庭と社会との関わりについては、そのような学びの後に触れ、より広い視点から家庭生活の営みを捉えられるようにしている。

資料2：題材「自分の成長と家族・家庭生活」の構成

1) 学年・題材名： 中学校第1学年・「自分の成長と家族・家庭生活」

2) 題材目標

○自分の成長や生活は、家族や家庭生活に支えられてきたことや、家族・家庭の基本的な機能について理解し、家庭は生活の場であり、基本的な要求の充足や心の安定を得ていることを理解できるようにする。また家族や地域の人々と協力・協働する必要があることに気付くことができるようにする【知識・技能】

○家族・家庭の機能を支える仕事や家庭生活を支える社会のしくみを知ることを通して、自分の生活や家族とのかかわりについて考えながら、自分の生活について問題を見だし、自分らしく生きることについての実践を評価・改善するなどして課題を解決する力を身に付けることができるようにする。【思考・判断・表現】

○家族や家庭生活で自立するための行動に向けて、家族や地域の人々と協力・協働するためには、様々な形があることについて振り返って改善しようとする態度を育てる。【主体的に学習に取り組む態度】

3) 指導計画(全4時間)

1 今の自分とこれまで・・・1時間

2 わたしの生活と家族・家庭・・・1時間

3 中学生にとっての家族・・・1時間 【本時 3/4】

4 家庭を支える社会・・・1時間

2) 本時「中学生にとっての家族」

本時では、資料3に示したように“家族一人ひとりの生き方を尊重した家族関係について考えること”、及び“その視点をふまえて家事分担を考えられるようになること”をねらいとした。

① 職業に対するジェンダーバイアスを家事分担の視点とつなぐ

本時ではまず、生徒自身の中に、特定の職業に対するジェンダーバイアス（外科医や大工は男性、家庭科教員や保育士は女性など）がないか確認する場を設定した（資料4のワークシートの問①）。

その上で、前時に記入させておいた問②に目を向けさせた。ここでは夕食作りを取り上げた上で、家族員のうち「誰が担当するのが良いと思うか」、ランキングを付けさせその理由を考えさせている。その際、生徒の多様な家族形態の状況へ対応できるよう、ダイヤモンドランキングのように家族員を全て書き出して順位づけさせるのではなく、敢えてランキング第1位の家族員と自分についてのみ記入していく形式とした。

ランキング第1位に「お母さん」や「おばあちゃん」など女性を挙げている生徒が31名中26名と最も多かったことに着目させ、職業だけでなく、家庭での家事分担においても、偏った見方で担当者を固定的に捉えていないか振り返る場としている。また、問③では、教師が示した事例、すなわち育児休暇中の男性が子どもと外出しているだけで、「あら、今日はお休みですか。」と近所の人から聞かれ、二日目までは笑って聞かれたけど、三日目からは話しかけてもらえなかったという話^{注3)}についても考えさせた。

資料3：本時「中学生にとっての家族」の目標及び指導過程

1) 本時の目標

○家族には互いの立場や役割があり、家事分担に対する固定的な捉え方を払拭し、協力することで家族関係をよりよくすることができることを理解する。

○家族一人一人が自分らしく生活していける暮らし方に目を向け、家事をどのように分担していくとよいか考えることができる。

2) 準備物

タブレット, 家事分担のアンケート結果, 職業と性別に関する資料, ワークシート, 写真(男性の家庭科教諭)

3) 本時の指導過程

学習活動および学習内容	指導上の留意点 (☆評価の視点〔評価方法〕)	資料・準備
1 「家族一人ひとりが生き生きと生活するにはどうすればよいか」についての現時点での考えを共有する	○ 前時にロイロノートに記入させておき、それらの考えを共有する場を設定する	・タブレット ・モニター
2 前時までの流れを確認する ・ 家庭の機能を支える仕事の分類を振り返る	○ 本時の見通しをもたせるために、アンケート結果を用いて振り返る場を設定する	・アンケート 「家庭における親の仕事と子どもの仕事」
3 本時の学習課題をつかむ		
家族一人一人が生き生きと生活できるよう家事の分担について考えよう。		

<p>4 職業と偏見について考える</p>	<p>○ 職業を性別で捉えてしまいがちな自分自身に気付けるよう資料を提示する</p> <p>○ 「普通は」という固定概念について考える場を設定する</p>	<p>・資料 (ある外科医の話)</p> <p>・ワークシート¹</p> <p>・写真 (男性の家庭科教諭)</p>
<p>5 家事の担い手に対する固定的な捉え方について考える</p> <p>(1) 自分の家族において、夕食作りを家族の誰が担うかについてのランキングとその理由を班で話し合う</p>	<p>○ 家事の担い手を性別や年齢等で固定的に捉えていることに気づきやすいように、夕食作りについて考える場を設ける</p> <p>○ 前時に記入したランキングとその理由を見つめる場を設ける</p>	
<p>(2) ランキングの理由を分類する</p>	<p>○ 生徒の思考の整理をするために、ランキングの理由を分類する</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「性別」 ・「時間的な余裕の有無」 ・「上手さ (技能)」 ・「年齢」 	<p>・ワークシート² (夕食作り担当のランキング)</p>
<p>(3) 「性別」について考える</p>	<p>○ 「性別」による偏見についての考えを深めるために、資料を提示する</p>	<p>・資料 (育休中の男性に対する周囲の反応)</p> <p>・ワークシート³</p>
<p>(4) 「時間的な余裕」について考える</p>	<p>○ 担い手の家庭及び家庭以外での“<u>立場</u>”や“<u>役割</u>”について気付くことができるよう、<u>樹状図</u>を記入し、考える場を設定する</p>	<p>・ワークシート⁴ (立場と役割についての樹状図)</p>
<p>(5) 「上手さ」、「年齢」について考える</p>	<p>○ 「上手さ (技能)」については、これから家庭科を学び、技能の獲得を目指すことを確認</p> <p>○ 「年齢」については、兄弟姉妹との家事分担の関係で考えさせる</p>	
<p>6 多様な家族があって、多様な家事分担をしていることを知る</p>	<p>○ 多様な家族の家事分担例を示す</p>	<p>・ワークシート⁵</p>
<p>7 家庭の機能を支えるために自分ができる仕事を考える</p>	<p>○ 自分ができることを再度見直すことができるように、5つの機能 (衣、食、住、育児、看護・介護) を支える仕事内容について考える場を設定する</p> <p>○ 一時の思いつきではなく、継続していく上で支障になることへの対策も考慮するよう助言する</p>	<p>・ワークシート⁶</p>
<p>8 「家族一人ひとりが生き生きと生活するにはどうすればよいか」を再度、記入し、相互に変容を把握する</p>	<p>○ 変容があった生徒の‘<u>考えの深化</u>’を共有する場を設定し、これからの生活へ向けた実践のきっかけとする</p>	<p>・ワークシート⁷</p>

り家庭生活の運営には、皆の協力が必要であることを実感できたであろう。

また、そのように樹状図を用いて外部化したことによって、その図示した内容を基に、他の生徒と相互交流し、さらに多様な家族員の“立場”や“役割”に気づくこともできるようになる。そしてそのような樹状図の結果や他者との相互交流をふまえて、家事の分担について再考することは、自分と家族との関わりを超えて“自分の大切さとともに他の人の大切さを認めること”につながる事が期待できる。

資料5：問②及び④の記述例

<生徒 29>

② 【夕食作りランキング】夕食作りは、誰が担当するのが良いと思うか記入しよう。

(1) 第1位は誰? その理由は? ← 理由
 第1位 (母) { 自分が作れないから。母が料理が上手だから。
 女性で作るイメージがある。 }

(2) あなたは何位? その理由は? ← 理由
 私は、第 (3) 位 { 部活などで忙しい。作る機会があまりない。 }

④ ランキング第1位 (担い手) について書き出そう。【 ① 立場 ② 役割 】

<生徒 28>

② 【夕食作りランキング】夕食作りは、誰が担当するのが良いと思うか記入しよう。

(1) 第1位は誰? その理由は? ← 理由
 第1位 (母) { 自分より僕の方が好き。自分より料理が上手。 }

(2) あなたは何位? その理由は? ← 理由
 私は、第 (2) 位 { 調理の経験が少なすぎるから }

④ ランキング第1位 (担い手) について書き出そう。【 ① 立場 ② 役割 】

<生徒 13>

2 【夕食作りランキング】夕食作りは、誰が担当するのが良いと思うか記入しよう。お父さんと僕は料理が得意で、お母さんは料理が苦手だ。

(1) 第1位は誰？ その理由は？
 第1位 (お父さん) [理由: 料理が上手いから。お父さんは料理が得意だ。]

(2) あなたは何位？ その理由は？
 私は、第(3)位 [理由: カンパインが苦手だから。]

4 ランキング第1位(相手)について書き出そう。【① 立場 ② 役割 :】

③ 「上手さ」等の捉え方への働きかけ

さらに、「家事の上手下手」、「自分は子ども（年齢が下）」だからといった視点にも着目させ、家事分担を固定的に捉えていないか振り返る場を設定した。

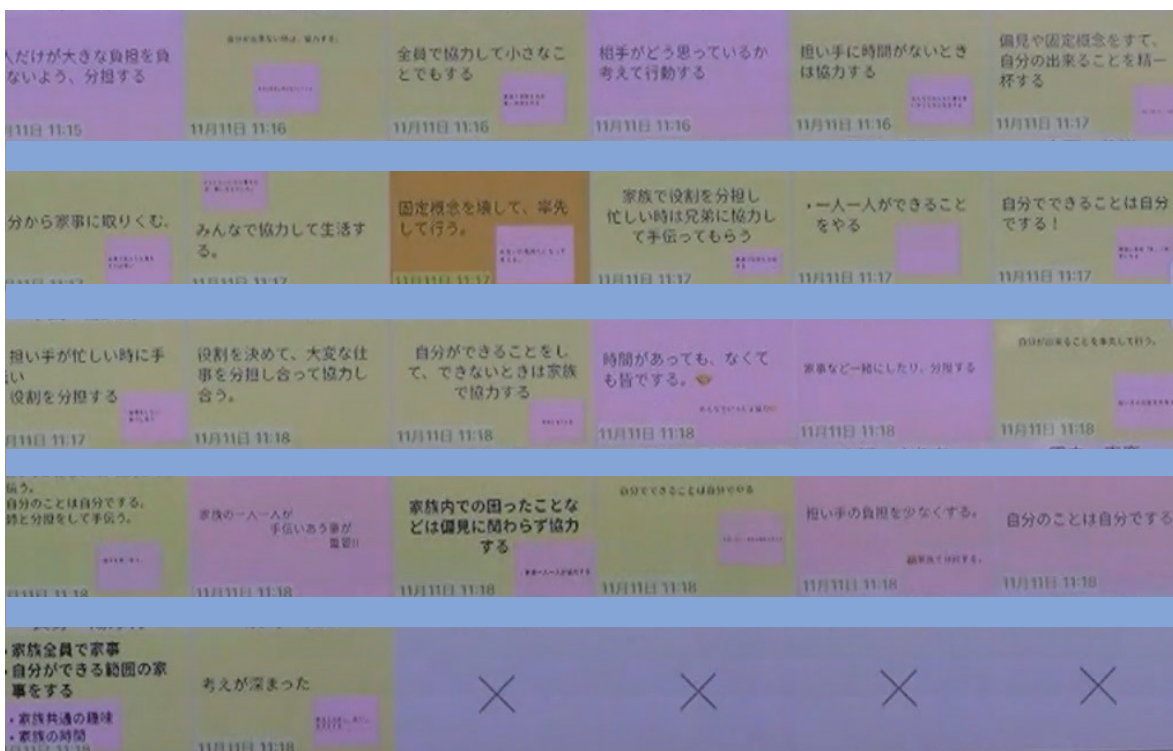
資料5の記述例にあるように、自分は「料理をうまく作れない（母は上手）」から分担ランキングは下位としていた生徒は31名中11名みられた。しかし、それは固定的なものではなく、中学1年生である現在は「うまく作れなく」ても、家庭科を学ぶことによって「上手」になる可能性があること、そしてそれにより「夕食を作ってもらう」立場から、「作ってあげる」立場に関係性を変化させ得ることに目が向けられるよう働きかけた。

また「自分は子ども（年齢が下）」だからとの理由に対しては、親子や兄弟姉妹の年齢が逆転することはないが、自分より年長の親や姉や兄の側に視点を移してみた場合に、自分がその立場であれば家族の中でずっと家事を担当することになるのか、問い直す場も設定した。

④ 自らの変化の把握

本授業では資料6に示したように、ICTの活用により自分の考えがどのように変化したのか把握できるようにするとともに、それらを他者と共有する場も設定した。前時に「家族一人ひとりが生き生きと生活するためにはどのようにすればよいだろうか」と問いを提示し、それに対する自らの考えを、ロイロノート上で配布したピンク色のカードに各自記入させていた。本授業の後に再度、同じ問いを投げかけ、黄色のカードに記入させ、その上に前時のカードを小さく重ねて、授業前後の変化が自分でも把握しやすいようにした。例えば前述した生徒13は、当初「お互いの気持ちになって考える。」と記入していたが、授業後には「固定概念を壊して率先して行う。」としていた。当初は問いに対して漠然と考えていたのが、授業後には自らの家事分担に対する固定的な捉え方を見つめ直した記述となり、その前後の変化を自覚することができたと考えられる。それにより家事をどのように分担していくのか、実践に向けて他人事ではなく具体的なイメージを持つことが可能になったのではなかろうか。

資料6：意見の共有



さらに資料6のように、ロイロノート上で提出された個々の記述を並べて、プロジェクターで提示し共有を図った。前後で変化がないものはピンク色のカードだけとなるが、変化があった場合は黄色で大きく示されるため、他者がどのように変化したのかについても一目で把握することができた。今回は文字入力 of 困難さのために、簡単な記述にとどまる状況もあったが^{注5)}、このように、学びを通してどのような内的変化が生じたのか相互に、確認し共有することが容易になることで、より深い考察につながることも期待できる。

3. 人権教育の視点を反映した家庭科授業の課題と今後の方向性

以上、本研究では人権教育の視点を反映した家庭科授業を構想・試行し、今後の家庭科教育の目指すべき方向性について検討した。

特に本時の授業では、夕飯作りの担い手について考える過程で、他の家族員の“立場”や“役割”に寄り添う場を設定することで、自分が挙げた担当者ランキングの理由に思い込みや偏見がないか問い直し、“自分の大切さとともに他の人の大切さを認め”た上で、家事分担を考える構成にすることができた。また、ICTの活用により生徒の記述や授業における変化等の共有が容易になった。しかし、入力操作の課題とともに、どの内容を全体で共有し相互の学びを深めていくか、生徒の家庭状況や心情もふまえてさらに検討していく必要があるだろう。

家庭科は人権について抽象的な議論にとどまることなく、生活場面や事象を取り上げて具体的に扱うことのできる教科であり、その特色を生かすことが重要である。今回は、家事の分担という実践に向けた題材において、自らの固定的な見方や狭い視野に気付く場を設定したが、

他分野においても 例えば住生活の営み方において、自分にとっての快適さばかりを優先して他の家族員に関わっていないか、他者に視点を移して問い直すことが可能である。

今回のように、自分にとって最も身近な他者である家族員との関係において具体的に考えられたことは、家族以外の人々との関係を考えることにもつながっていくであろう。

そのように自らの視野の狭さに気付き拡げていくことは、他者理解につながるだけでなく、自分自身が偏った見方や思い込みから解放され、生きやすくなる⁵⁾と考えられる。家庭科での人権教育の視点を反映した授業づくりへの更なる取り組みが求められている。

Ⅳ．注記

- 注1) 人権教育の指導方法等に関する調査研究会議は、文部科学省の諮問機関であり平成15年から調査・検討が行われてきた。
- 注2) 本授業は、宮崎市立大塚中学校の外山敦子教諭と筆者が協働で構想し、「みやざき人権教育ゼミナールⅣ：家族について今一度考えよう」(令和3年度宮崎県人権啓発活動協働推進事業)で報告した授業内容であり、一部修正を加えている。
- 注3) 法務省・第32回全国中学校人権作文コンテストにおける全国人権擁護委員連合会長賞受賞作文より引用
- 注4) 番号は生徒の職別番号。以下同様
- 注5) 本研究で対象とした生徒は、中学校で初めてロイロノートの使用を開始し、授業実施時点でも文字入力の習得には個人差がみられた

Ⅴ．引用・参考文献

- 1) 人権教育及び人権啓発の推進に関する法律(平成12年12月6日法律第147号)
- 2) 人権教育の指導方法等に関する調査研究会議「人権教育の指導方法等の在り方について[第三次とりまとめ]」平成20年3月
- 3) 伊波富久美、「わかったつもり」を問い直す家庭科での学び. あいり出版. 2014.p.79-80.
- 4) 文部科学省, 中学校学習指導要領(平成29年告示), 東山書房 .p.137
- 5) 前掲書3) p.9-12.
- 6) 伊波富久美, 松本仁美, 小林博典. 宮崎県におけるインターネット環境と高校家庭科でのICT活用状況. 宮崎大学教育学部紀要, 第96号, 1-11.2022.